

重訳版『内乱史』第4巻

——三頭派と共和派の死闘——

アッピアノス（著）

ホレイス・ホワイト（英訳）

今居清綱（邦訳）

目次

訳文についての覚え書き	iv
-------------------	----

『内乱史』第4巻	1
----------------	---

第1章	1
-----------	---

オクタウィウスとアントニウスの和解、そしてオクタウィウス、アントニウス、レピドゥスの新たな三人委員——兵士に約束されたイタリアの略奪——ローマでの恐るべき前兆

第2章	3
-----------	---

三人委員によって布告された公権剥奪——最初の虐殺——三人委員の都入り——公権剥奪の文書

第3章	6
-----------	---

三人委員が己の近親を公権剥奪者名簿に載せる——都での恐慌——密告者や刺客としての家内奴隷——苦しみと恐怖の光景——いくつかの注目し値する事例

第4章	9
-----------	---

護民官サルウィウスが宴席で殺される——アンナリスとトラニウスが息子に裏切られる——キケロの逃走と追跡——キケロが殺されて首と手が演壇に吊される——エグナティウス父子、バルプスとアルンティウス——リガリウス二兄弟——セプティミウスが妻に裏切られる——他の墮落した女たち——スタティウス、カピト、そしてウェトゥリヌス——奴隷と主人——興味深い偶然の一致——ウァルスとラルグスの事例——ルフスが家のために公権剥奪を受ける

第5章	18
-----------	----

財産のせいで公権剥奪を受けた子供たち——没収された財産の売却——婦人たちに課された税とホルテンシウスの娘が人前でぶった演説——三人委員が課税を緩める——兵士による乱暴狼藉

第6章	21
-----------	----

逃れた公権剥奪者の実例——レピドゥスの兄弟とアントニウスのおじが逃げ果せたこと——メッサラとピブルス——アキリウスとレントゥルス——アブレイウスとレギヌスの逃亡——オピウスがどのようにして息子によって救われたか——メテッルス父子——マルクスとレスティオが奴隷に救われたこと——忠実な解放奴隷——ポンポニウスの大胆な行動——二人の逃亡者の奇妙な戦い——歴史家ウァッロがどのようにして助かったか——雄弁家ウィルギニウスがどのようにしてシキリアに逃げたか——マルクス・ロリウスの奇妙な冒険——バルピヌスとレピドゥス——キケロの息子が逃

げ延びて愛顧を取り戻す	
第 7 章	32
属州での戦争——アフリカのkolnifikiusとセクスティウス——プブリウス・シ ッティウスの冒険譚——ウティカでの戦い——アフリカでの戦争の終結	
第 8 章	35
ブルートゥスとカッシウス——いかにしてカッシウスがシリアで挙兵したのか——カ ッシウスがエジプトから四個軍団を得る——カッシウスがドラベッラに向けて進軍す る——カッシウスがラオディケイアを占領し、ドラベッラが殺される——オクタウィ ウスとアントニウスがアドリア海を越えつつあるとブルートゥスがカッシウスに知ら せる——カッシウスがタルソスを占領する	
第 9 章	40
カッシウスがロドスに降伏を勧告する——ロドス人が戦いを決意する——ロドス人が カッシウスへの使節としてアルケラオスを送り、アルケラオスが一席ぶつ——カッシ ウスの返答——カッシウスとロドス人の海戦とロドス艦隊の退却——カッシウスがロ ドス市を包囲する——ロドスが占領されて貢納を押し付けられる——アジアでの一〇 年分の貢納取り立て	
第 10 章	45
マケドニアのブルートゥス——ブルートゥスがクサントスに向けて進軍する——クサ ントスの破れかぶれの防戦——クサントス占領——クサントス人がこの都市と自らを 滅ぼす——パタラ占領——ムルクスがアントニウスを封鎖するためにブルンドゥシウ ムへと航行する	
第 11 章	49
ヒスパニアでのセクストゥス・ボンペイウスの行動——ボンペイウスがシキリアに向 かう——ボンペイウスとサルウィディエヌスの海戦とサルウィディエヌスの敗走—— オクタウィウスとアントニウスがアドリア海を渡る——オクタウィウスとアントニウ スの先遣隊がピリッポイに進み、トラキアの山岳地の峠を占領する——ブルートゥス とカッシウスがピリッポイへと動く	
第 12 章	55
ブルートゥスとカッシウスがメラス湾に到達する——カッシウスの共和派軍への演説 ——演説の後に共和派軍が敵に向かう	
第 13 章	60
ティッリウス・キンベルが艦隊を率いて敵側面を脅かす——ブルートゥスとカッシウ スが山脈に手間取る——トラキアの森での重労働——ブルートゥスとカッシウスがピ リッポイに到達する——ブルートゥスとカッシウスが丘に陣取る	
第 14 章	63
アントニウスがアンピポリスに到達し、ピリッポイへ猛進する——両軍の戦力、ブルー	

トゥスとカッシウスが敵を飢えさせようと望む——アントニウスが戦いを強制しようとする——アントニウスがカッシウスの防塁を攻める——ブルートゥスがオクタウィウス軍を敗走させて野営地を占領し、アントニウスがカッシウス軍を敗走させ、カッシウスの野営地を占領し略奪する	
第 15 章	66
カッシウスが自害する——ブルートゥスがカッシウスの遺体に涙する——アドリア海での海戦——アントニウス艦隊が壊滅する	
第 16 章	68
ブルートゥスが軍に語りかける——アントニウスが兵士に向けた演説——アントニウスが敵に戦いを挑む——三頭陣営での物資の欠乏——ブルートゥスが戦いを決り、ブルートゥスの兵が苛立つ——ブルートゥスの将官たちが戦いを訴える——ブルートゥスが次々兵士たちに折れる——オクタウィウスとアントニウスが軍を激励する——戦いの前の前兆とピリッポイでの第二回戦——共和派の軍が敗走する	
第 17 章	75
ブルートゥスが山地へと逃げる——ブルートゥスの将官たちが再戦を拒み、ブルートゥスが自殺する——ブルートゥスとカッシウスの人となり——彼らのカエサルへの罪、ブルートゥスの天幕に現れた死霊——若カトーの死——ボルキアの死——勝利の大きさ——勝利の長期的な結果	
英訳者による付録	82

『内乱史』第4巻

第1章

オクタウィウスとアントニウスの和解、そしてオクタウィウス、アントニウス、レピドゥスの新たな三人委員

1 自身の属州で敗れたカエサル殺害者の二人、即ちアジアのトレボニウス、ガリアのデキムス・ブルートゥスの身に降りかかった罰は以上のようなものであった。カエサルへの陰謀の首謀者で、シリアからマケドニアまでの領土を支配して騎兵の大兵力と水夫と二〇個軍団以上の歩兵及び艦船と資金を有していたカッシウスとマルクス・ブルートゥスがどのようにして報復を受けたのかについてはこの『内乱史』第四巻で示される。これらの出来事が展開していた間、ローマでは公権剥奪を被った人たちの追討と捕縛とこれに続く被害が生じており、自分の敵対者たちを最初に公権剥奪者名簿に載せたスッラの時代を除くならば、ギリシア人の内乱や戦争でもローマ人自身の内乱や戦争でもこれとの類似例は思い出すことはできない。マリウスは自身の敵対者を捜索して見つけた者は罰したが、スッラは公権剥奪を受けた人を殺す者に莫大な褒賞を、匿う者には厳罰を宣言した。しかしマリウスとスッラの時代に起こったことについて私はすでに彼らに触れた歴史の箇所ですべておいた。次に来るのは続く出来事である。

2 オクタウィウスとアントニウスはムティナ市近くのラウィニウス川⁽¹⁾にある緩やかに傾斜していた小島で対立を調整した。彼らは互いに向かってそれぞれ五個軍団の兵を並べ、その後各々三〇〇人を連れて川に架かる橋に進んだ。レピドゥスその人が先に島に行って島を捜索し、軍用外套を振って来るように合図を出した。それから各々は橋上の友人たちにこの三〇〇人を託して残し、障害物がなく見晴らしの良い島の真ん中へと歩み出て三者は会談に入り、オクタウィウスが執政官だったために彼が真ん中を占めた。彼らは二日間朝から晩まで会談し、以下のような結論に至った。オクタウィウスは執政官職を辞任してウェンティディウスがこの年の残りの任期の執政官になり、内紛を収拾するために新たな政務官が法に則り創設されてレピドゥス、アントニウス、オクタウィウスが五年間執政官権限を帯びてその地位⁽²⁾に就くこととする——おそらく独裁官を廃止するアントニウスの法令のため、独裁官の呼び名よりもこちらの呼び名が選ばれたのであろう。この三人はすぐに毎年の都の政務官を向こう五年分指名し、属州の分割が行われてアントニウスにピレネー山脈と

⁽¹⁾ 会談の場所としてムティナ近郊のラウィニウス川（ポノニアから西4kmを流れ、下流でレーノ川と合流する今日のラウィノ川）を挙げているのはアッピアノスだけで、ブルタルコス（「キケロ」, 46）とカッシウス・ディオ（XLVI. 55）はポノニア近くの川（ポノニアの西を南北に流れるレスス川（今日のレーノ川））としている。

⁽²⁾ 正式名称は「国家再建のための三人委員」。いわゆる第二次三頭政治の始まり。

接する旧ガリアと呼ばれる属州を除くガリア全域が与えられた。旧ガリアはヒスパニア共々レビドゥスに割り当てられた一方で、オクタウィウスにはアフリカ、サルディニア、シキリアが近辺のその他の島嶼共々割り当てられた。

兵士に約束されたイタリアの略奪

3 ローマ人の支配域は三人委員の間でこのように分割された。アドリア海の向こう側の地方はまだブルトゥスとカッシウスの支配下にあり、アントニウスとオクタウィウスは彼らとの戦争を企図していたので、これらの分割だけは延期された。レビドゥスは翌年⁽³⁾の執政官に予定されて必要な処置を行うために都に残った一方で、ヒスパニアは代理人を通して治めた。彼は都を守るべく麾下の軍団のうち三個軍団を保持し、その他の七個軍団のうち三個軍団はオクタウィウスに、四個軍団はアントニウスに分けることにしたため、彼らの各人は戦争のために二〇個軍団を率いることになったようである。戦利品とその他の贈与、植民地としてのイタリアの一八都市——あたかも戦争で敵から分捕ったものであるかのよう——に、富裕さと領地の肥沃さ、立派な邸宅のために優れていた諸都市（土地、建物、全てのもの）は彼らの中で分割される予定になっていた——への期待で軍を励ますために彼らはこれらを与えると約束した。これらの諸都市のうちで最も令名高かったのはカプア、レギウム⁽⁴⁾、ウェヌシア、ベネヴェントゥム、ヌケリア、アリミヌム、そしてウィボ^(一)だった。このようにしてイタリアの美しい地方の大部分は兵士たちのために目をつけられた。しかし三人委員は私的に敵対していた人たちを予め滅ぼそうと決意し、自分たちが海外で戦争をしている間に自分たちの措置を邪魔できないようにした。こういった決定に至ると彼らはこれらを文書の形にし、執政官としてオクタウィウスは公権剥奪を除く全てを兵士たちに伝えた。これらのことを聞くと兵士たちは喝采を送り、融和の印として互いを抱擁しあった。

ローマでの恐るべき前兆

4 これらの処理が行われていた間、多くの恐るべき超常現象と前兆がローマで見受けられた。犬が狼さながらの遠吠えをし、これは恐るべき前兆だった。本来なら都市にはいない動物である狼が公共広場を駆けた。牛が人語を話した。新生児が言葉を喋った。いくつもの像が汗を流し、中には血の汗を流したものもあった。何も姿が見えないのに男たちの大声、武器のぶつかる音と馬の足音が聞こえた。多くの恐るべき前兆が太陽の周りで現れ、石が雨あられと降り注ぎ、聖なる神殿と画像に絶えず雷が落ちた。その結果、元老院はエトルリアの

⁽³⁾ 紀元前42年。同僚はプランクス。

⁽⁴⁾ イタリア半島のつま先、シキリアに面したギリシア都市。今日のレッジョ・ディ・カラブリア。

^(一) ブルッティウムの町で、ギリシア人からヒッポニオンと呼ばれた。現在のモンテ・レオーネ。

ト占師と予言者に遣いを送った。彼らの中の最長老が言うには、昔の王が統べる時代が戻り、その人を除く皆が奴隷となるとのことで、それから彼は口を閉じて死ぬまで息を止めた。

第2章

三人委員によって布告された公権剥奪

5 自分たちだけになるや否や三人委員は処刑されるべき人の名簿の作成に入った。彼らはその勢力のために疑念を抱いていた人たち、そしてまた自分たちの私的な敵対者らを名簿に入れ、自らの縁者と友人を交換して両者をこの時とその後で殺した。彼らはある人たちを敵対の故に、他の人たちを単なる嫉妬の故に折に触れて名簿に追加し、このために彼らの敵対者の友人や友人の敵対者が犠牲者になった。アジアでの歳入は未だ金を集めていたブルートゥスとカッシウスに入り、王と太守たちは彼らと手を結んでいたために三人委員は膨大な軍資金を必要としていたため、ある人たちはその富の故に公権剥奪を被った。ヨーロッパ、とりわけイタリアは戦争と苛斂誅求で疲弊し尽くしていたため、三人委員はこのように手元不如意であったというわけである。このために彼らは平民、ついには女たちからも非常に重い寄付金を徴収し、売買と賃借への課税すら考慮に入れていた。ある人たちは立派な別荘や都の邸宅を持っていたために公権剥奪を受けた。死と財産没収を宣告された元老院議員はおよそ三〇〇人、いわゆる騎士はおよそ二〇〇〇人に上った。三人委員の兄弟とおじ、そしてまた彼らの下で働いて司令官らと共に苦勞した副官たち、ないしは彼らの同僚の副官たちも公権剥奪者名簿に載った。

最初の虐殺

6 ローマに向かうために会議を打ち切ると彼らは犠牲者の数が膨大となった公権剥奪を後回しにしたが、予告なしにキケロを含む一二人、あるいは幾人かの言うところでは一七人の最大の人物たちを殺すための処刑人を先だって送ることを決めた。そのうち四人は宴席ないし街路での出会い頭ですぐさま殺された。その他の人たちの捜索の手は神殿と家々に伸びた。突然の大混乱が起こってこれは夜通し続き、占領された都市のように叫び声と嘆きの声を上げながら人々はあちこちを駆け回った。捕らえられて殺戮された人があるのが知られると、誰にも予め公権剥奪を宣告されていなかったにもかかわらず、追跡者が探しているのは自分だと誰もが考えた。自棄になって家や公共の建物に火を放とうとした人、取り乱すあまり襲われる前に悪事を働こうとした人もいた。執政官のベディウスが伝令を連れてあたりを駆けずり回り、夜明けまで待ってより正確な知らせを得るよう述べて宥めなければ彼らは実際にそのようにしていたことだろう。朝が来ると、三人委員の意に反することではあったがベディウスは、これは内戦の首謀者であって罰を受けるのは彼らだけだと思うれるとして件の一七人の名簿を公表した。三人委員の決定をつゆ知らぬ彼は残りの人たち